

詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems



第 27 号
2025 年 3 月

目次

伊東友乃	スプーン	2
関根全宏	もうひとつの墓	4
画図佳織	帰り道	6
竹田絵美	まだ殻、これから	7
結城琴美	願望	8
	秘密の話	9
	星座の始まり	10
	運命の赤い糸	11
	理想の配分	12
岩間朱寿	よろしくの代わりに餞(はなむけ)を	14
	今、会いにゆきます	15
柴田奏子	我慢	16
	大きな子供	17
永松佑香	思い出せるその日まで	18
	雪解け	20
渡辺信二	クリュティエの遺言	21
	太陽考	22
	転生の前に	24
鈴木順三	「待つことは祈り」	1 (表紙)
	「待つことは祈り」	2 (裏表紙)

表紙原画

スプーン

伊東友乃

揺さぶり ほどかれた

そのまま わたしの一部は

果物の影のしたでひっそり 固まって

今朝はちようどよく 吐息くらいに温い

窓枠にのこされた言葉たち

もう思い出せないくらい やわらかに甘く

影から 少しずつ萎んでいる

今日の天気はなんですか？と

すこし悲しげに

聞いたあの人の

ふりむいた顔は銀色だった

きれいなつややかな

いっぽんのスプーンみたいで

握ってみれば

あの水平線のむこう

くもり雲が群れているあたりを

一緒にかき混ぜてみようと

誘いたいし誘われない

もうひとつの墓

関根全宏

墓はすでに、そこに記されている名、そして碑銘
にもかかわらず、忘却のはじまりである。

——イヴ・ボンヌフォワ「ラヴェンナの墓」

会葬者は長い列だった

都会の大人びた顔が

片田舎の畦道にならび

青年の生家に向かっていた

その先に甘い露など

ないというのに

あるのは黒枠の写真で

妥協による理想の実現はありえないとは

自明之理で

青い大学ノートに書き記されていた

若き日の宣言だった

それは蟻のような小さな字で書かれ

以降 白紙のページが続いていた

そのやわらかな空白のなかで

花環がしおれ

土埃がたつ

儀式はつねに空虚で

生者の声は沈黙し

もうひとつの墓からは

死者の歌声が聞こえる

明日だけでなく

明後日も

ここは違国だ

帰り道

画図佳織

いくつもの蕾がほころんで
あたり一面を
にぎやかな声がころがっていく
追いかけて、追いかけられ
小鹿みたいに軽々と
駆け回れば
やさしい色をした花で
覆われる冬の土
生まれるずっと前から
始まっていた遊びのつづきには
母たちの呼び声も届かない
その日が終わらないように
いつまでも駆け回って
あしたの約束は一度もしない

まだ殻、これから

竹田絵美

金より時間のほうが貴重なんだから

無駄な時間延ばすな

生半可なのに本格派

いつも主人公のほずがお客さん

意識だけがソーシャル化

練習するお風呂場

だけど本体は置いてけぼりのまま

そんな不安

結局孤独が婚約者

願望

結城琴美

あなたの仕草のひとつひとつが

私の心臓を速くして

私はあなたに殺されてしまいそうになる

その死は始皇帝やモーツアルトの死よりも美しく尊い

そしてあなたの美しいメロディーを片耳に

あなたで死にたい

秘密の話

結城琴美

みんなが私を笑う

私も私を笑う

そんな私の笑顔はブルーだ

ブルーな本音を笑いに変えるのも疲れた

綺麗な月が雫を反射させる時は

誰も私を笑わない

星座の始まり

結城琴美

あなたの大きな粒の涙は
水たまりから湖になる
動物たちがやってきて
あなたの涙を飲む
あなたの涙を飲んだ動物たちは
空に昇って綺麗な星になり
あなたの顔を明るく照らす
僕だけが知る星座の始まり

運命の赤い糸

結城琴美

あなたと繋がった赤い糸
あなたが歌うたびに揺れる糸は
波のようにしなやかで
あなたが愛しているというたびに揺れる糸は
陽だまりのように愛おしい
この糸が揺れているあいだは
これからもあなたの側に

理想の配分

結城琴美

あの人と作ったハートのチョコ
とろけるように甘くて時に塩っぱい
最後には苦くなつて砕け散った

次はずっと甘くなるように調味料をかえて
塩っぱくならないように

苦くならないように
傷つきながらできた完璧な配分

新しい彼と作ったハートのチョコ
とろけるように甘いのは一瞬で
すぐにまた塩っぱくなつて苦くなつた

また傷つかなくちやいけないの？
もう苦い味は食べたくないのに
完璧な配分を作ったのに

これらの言葉を胸にしまい
また調味料を探しに行く

よろしくの代わりに饑（はなむけ）を

岩間朱寿

長い列の先頭で花に埋もれる
愛されているんだね

小窓のあなたが
ふわりと燃える

こちらは何も心配しないでいいから
ひとつだけ

もしあの人に会えたら
二度と戻るなど伝えてください

あなたにもあの人にも
早めの再会は怒られそうだから

見送る役目が終わるまで
私はしばらくこちらに居ます

今、会いにゆきます

岩間朱寿

チケットとリュックだけ
寝台列車が下弦の月夜を走るから

明日の朝

日が出る頃には

瀬戸内海が見えるらしい

今、会いにゆきます

軽い会釈と久しぶり

赤のジャケットは予想外

でもそういう人だった

美味しい広島名物の店

連れて行って下さい

我慢

柴田奏子

痛い泣き叫ぶ子供を見て

私は思う

君は幸せ者だなと

大きな子供

柴田奏子

まだ純粹だったあの頃

大人は泣かない

大人は好き嫌いしない

大人は勉強しなくていい

まだ見ぬ自分へ

根拠の薄い希望を抱いていた

そんなあの頃の私に告げる

大人でも泣くし

大人でも嫌いなものは嫌いなままだし

大人になっても勉強しなきゃいけないし

表面的な部分だけが大きくなり

それ以外は子供と変わらないのだと

思い出せるその日まで

永松佑香

駆け抜けた青い道

いつの間にか大人になった

年を重ねても思い出すのは

オレンジ色の淡い記憶

鮮明だったその波の音も

今では朧気で

少し悲しくなった

すり減った青い心

いつの間にか忘れていた

幼いなりに抱いていた

オレンジ色の好奇心

心躍る水遊びも

今では退屈で

少し切なくなった

暖かい記憶も

痛かった記憶も
全て砂の中に閉じ込めておこう

雪解け

永松佑香

僕の心は冷え切ってしまった
まるで硬く冷たい雪のように
氷の下をさまよう無様な自分に
心底呆れた

何をしていても無関心になった
あの頃のようなときめく気持ちも
揺らめく火種のような少しの闘志すらも
何もかも失ってしまった

太陽が昇り温かい陽だまりが迎えに来た
凝り固まっていた氷のような心は
少しずつ溶けていった

私は無くなった感情を徐々に取り戻した
冷やかだった氷のような表情は
少しずつ和らいでいった

クリユテイエの遺言

渡辺信二

太陽を好きになつてはいけない

太陽は 全ての輝きを奪つて

泰然としているのだから

太陽を好きになると わたしのように

己を失い 焦がされ 堕ちる

あるいは 朝露とじぶんの涙だけを

口にして朽ち果てる

月や星を考えて バランスをとるように

月とは 共に眠るのもよい

星には 願いをかけてもよい

だが 太陽には 上から照らしてもらおう

その下を走る 歩く 回りを巡るのでよい

太陽には 何も願わないように

太陽とは 距離をとるのがとても良い

太陽考

渡辺信二

中心の喪失
永遠の空位

正中の上下左右から

逆説の開幕
欲望の奔流

周辺が吸い寄せられ

不覚の前後
未決の未来

辺境が中央を目指し

失意の中枢
終焉の心意

象徴の穩やかな直立不動

不在の中核
そして？

転生の前に

渡辺信二

どこから来たか

いつ おのれが区切られて

一個の命となったのか

人であると知ったのは あれは いつか

己を見つめる眼差しが 知を超えて

次第に大きくなる円を

視野に納めながら

なお その中心を静かに見つめる

最後の円周を描き終えたなら

次の蘇りへ向かう

蘇るには 死なねばならぬ

死ぬに 何の悔いがあるうか

ひよつとして 円とは 太陽だったか

向こうへ行けば わかることだが

寄贈詩誌・詩集等は下記『立彩』編集室宛てにご送付をお願いできれば幸いです。

〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1
東京家政大学人文学部 関根全宏研究室気付

★詩誌『立彩』のホームページを開設しました。バックナンバーも閲覧できますので、下記 URL および QR コードよりご覧ください。



<https://sekine-ma.wixsite.com/rissai>

2024年8月1日から2025年1月31日までに贈られた詩誌等一覧

○詩誌

『コールサック』119号、120号。

『しまぞう』18号。

『白亜紀』170号。

『万河・Banga』32号。

『孔雀船』104号、105号。

『Culvert』8号

○詩集

方良里『レモングラス』コールサック社、2024年。

風守『希望の詩魂』コールサック社、2024年。

藤田博『藤田博著作集 第二巻 全詩集Ⅱ』コールサック社、2024年。

古道正夫『S村点描』コールサック社、2024年。

望月苑巳『増殖する、定家』泰流社、1987年。

中山たかし『独り言も、良いかも』コールサック社、2025年。

南椋椋『ソノヒトカヘラズ』七月堂、2024年。

○その他書籍・論文・エッセイなど

林邦夫『スペイン中近世の国家と社会—多文化・多宗教の世界』刀水書房、2024年。

矢野久美子『アーレントから読む』みすず書房、2024年。

鈴木洋美編集『ランドスケープ・アーキテクト杉尾伸太郎—語りで紡ぐ私の戦中・戦後・現在』ブレック研究所、2024年。

井上健ほか監修編『比較文学比較文化ハンドブック』東京大学出版会、2024年。

藤本雅樹監修『アメリカン・ポエジーの水脈』小鳥遊書房、2024年。

諏訪部浩一『チャンドラー講義』講談社、2024年。



詩誌『立彩』第27号 2025年3月20日発行

頒価 300円

編集発行 「立彩」

〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1

東京家政大学人文学部 関根全宏研究室気付

印刷 株式会社DTP出版 TEL 03-5621-4531